

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	保育現場における改善方法の探索 －こどもの行動変容に着目して－
キーワード	①保育の工夫、②子どもの行動、③保育の効果測定

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ナカオ アヤコ 中尾 彩子
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	修紅短期大学 幼児教育学科 講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	修紅短期大学 幼児教育学科 講師
プロフィール	群馬県出身。文京学院大学を卒業後、同大学大学院人間学研究科に進学し、発達心理学を学ぶ。現在は修紅短期大学幼児教育学科講師として保育士、幼稚園教諭を志す学生を指導している。研究の関心は、保育現場の中でいかに保育者が振り返りを経て実践に活かすかということにある。こうした関心のもと、研修会の効果などその手立てについて調べている。

1. 研究の概要

(1) 研究の経緯

本研究は、現状で行われている振り返りによって、保育者が行った環境構成や仕掛けを保育者自身が客観的に評価できているのかという疑問から構想された。保育者は、物的環境や人的環境である自身の言葉がけなどにさまざまな思いや意図といったものを込めている。それらのフィードバックは子どもの姿によってなされるが、様々な活動が同時に進行する中で記録するのは難しく、また、その中で気づくことができる子どもの変化もごく一部であると考えた。そのことから、ビデオカメラを用いて自分だけでは気づくことのできなかつた子どもの姿を研究者や同僚と共に評価することで、より効果的に振り返り、実践に活かすことができるのではないかと考え、協力園に依頼を行い園長等と話し合いを行った結果、次のように取り組むこととした。

- ①ウェアラブルカメラを用いて保育者の視線で子どもたちの様子を記録する。
 - ②装着した保育者と園長、著者で振り返りを行い、次の実践に活かす。
 - ③振り返りの実践を行うことができたか再度振り返りを行う。
- 上記3つの調査結果を踏まえ、振り返りの方法の効果を考察した。

(2) 研究の特色

本研究では、実践を保育者の胸元につけたウェアラブルカメラを用いて記録する方法をとった。定点カメラはクラス全体や園庭の一部などを見渡すことが可能であるが、子どもとの密なやり取りは記録されづらく、また注目したい部分が近くない場合があるという欠点がある。しかし、ウェアラブルカメラにすることで、子どもとの距離、会話、保育者の体の向きなどを記録することができることから、振り返りの効果をより高め園内研修会の改善や保育者のスキルトレーニング方法を得るという発展性も本研究の特色であると思われる。

(3) 独創性

子どもの行動観察において参与観察や定点カメラによる観察は多く行われているが、ウェアラブルカメラを装着しての行動観察は少数であるように思われる。子どもの園での遊びは、多様で保育者の関わりもまたそれに付随して多様である。それらのやり取りをまるで隣で見ているかのように記録することができるこの手法に独創性があると考えられる。

2. 研究の動機、目的

(1) 研究の動機

常々、研究者が行いたい園での研究と、保育者が園で研究して欲しい内容に乖離があるのではないかと、園をフィールドとして借りるのではなく、保育者が園で研究して欲しい内容を理解し、研究を行うことはできないだろうかと考えていた。養成校の教員となったことで、園外研修の講師として呼ばれる機会が増え保育者と話すことも増えたころ、保育者からどのように振り返りを行い、共有したら良いか、また振り返りのテーマをどのように決めたらよいか悩んでいるという相談を受け考えたことがきっかけとなり本研究を構想した。

(2) 研究の目的

本研究では、保育実践をウェアラブルカメラによって記録し、保育者と子どもの言動を対象にして、振り返りを行う方法を模索した。対象者の視点に近い映像を用いて振り返りをおこなうことで、本人が気づかなかつた変化を第三者と共有し、次の実践に活かせるかの検討を行うこととした。

3. 研究の結果

岩手県における協力可能な保育所にて、調査を行った。対象保育士は4歳児クラス配属の3年目保育士と1歳児クラス配属の1年目保育士の2名であった。この2名と園長に対しヒアリングを行ったあと、ウェアラブルカメラを装着して保育を行ってもらった。

① ウェアラブルカメラを装着して得ることができた記録

1年目保育士によって記録された保育では、子どもたちが対象保育士からすぐに離れてしまう姿がたびたび見られた。ヒアリングの中で「子どもとうまく遊べない」と話していたことが映像として記録されていたことがわかった。3年目保育士によって記録された保育では、次々とやってくる子どもとやり取りをしながら環境整備を行っている姿が記録された。ヒアリングの中で「サブの先生にお願いしていいのか、それとも自分がやってしまったほうがいいのか分からず、やらなきゃいけないことで時間がどんどん消えていく」と話していたことが映像として記録されていたことがわかった。両者ともに言語化すると曖昧になってしまっていた状況が映像によって明確された。

② 映像を用いた振り返り

2名が記録した映像をヒアリング内容をもとに筆者が20分程度に編集し、まず園長と筆者で振り返りを行った。園長は映像を事前に視聴することにより「うまく遊べない」「時間がない」の具体的な状況を把握し、改善案をいくつか提案する準備を行った。その後、対象保育士をそれぞれ呼び、保育士、園長、筆者の3名で振り返りを行った。3名での振り返りは1時間程度で、映像を見ながら保育士が園長に状況を説明し、園長は改善案を具体的に示しながら次の実践への課題を提案して終了した。

③ 振り返り後の実践の確認

園長から具体的に提案されたことで1年目保育士は子どもへの関わりのタイミングや言葉選びが変化し、子どもたちが保育士とよく遊ぶ姿が記録されていた。3年目保育士はサポートの先生への依頼の回数が増え、環境整備にかかる時間が減少し子どもとの関わりや次の展開の準備が増えたことが記録されていた。

以上のことから、ウェアラブルカメラを用いた振り返りによって保育士の行動が変化し、それに伴って子どもの姿も変化したことが確認できた。また、本人では気づかなかつた改善方法を振り返りの中で第三者に見つけてもらうことで、次の実践に活かせることも確認することができた。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究終了後、他園から同様の内容を園内研修で行なって欲しいという依頼を受け、個々の振り返りではなく、園全体で共有する振り返りを同様の手法で行なった。その結果、個々の振り返りのときにはできなかった同僚とのやり取りの振り返りや、カメラ装着者ではない保育士による補足説明などが研修内で行われたことにより、学年全体での改善を行う事ができた。今後は、園内研修だけでなく園外研修でも同様の手法が取れるか探り、さらには保育士のスキルトレーニングの手法を確立させたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

私は、大学院卒業後すぐに研究分野で活動することができず、2016年に機会に恵まれ現職につくことができました。しかし、いざ研究を始めようとする、研究環境の整備は難しく、なかなか踏み出すことができないでございました。そのような中で本ご支援は、私の背中を押ししてくれました。本ご支援を頂戴できたことは、私にとって大変幸運でした。心より御礼申し上げます。

おかげさまをもちまして、園が研究してほしい内容を研究したいという私の望みに近づき、園との協同で進められるようになりました。また本研究は、コロナ禍により、対面による学会参加等の機会がなくなったり、園内に部外者が入ることが困難な期間があった時期でしたが、本ご支援によって得ることのできた研究環境によって乗り越えることができました。また、研究期間延長の措置により、対象園に必要以上の負荷をかけることなく研究をすすめることができました。ありがとうございました。まだまだ研究者として未熟な自分ではありますが、今後も保育者と子どもに関わる研究をしていく所存ですので、これからも変わらぬご支援、ご厚情を賜りますよう、よろしく願いいたします。